

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌  
【フィールド・ノート】 no. 84 Mar. 2015

# FIELD NOTE

no. 84 Mar.

特集

## 変化を繙く

ひもと

—文化と人とその時代—

消えてしまうわけは

「ムジン」は今……最終回

地域文化の移り変わり

祭りを続ける思い

—下小野の道祖神祭—

ここに建っている





# FIELD·NOTE

no.84 Mar.

## CONTENTS

- 06 特集 **変化を繙く** ひもと  
—文化と人とその時代—
- 08 消えてしまうわけは
- 10 連載最終回「ムジン」は今……  
よんくみめ 名前のない無尽会のかたのお話
- 13 都留の文化の移り変わり
- 16 祭りを続ける思い  
—下小野の道祖神祭—
- 19 ここに建っている
- 22 特集まとめ
- 24 フィールド暦
- 26 あの人の尊敬する人 最終回  
佐藤悦子さん—尊敬する人される人の関係—
- 29 ビオトープだより 冬 no.04
- 30 「レストラン鎌倉」という場所 前編



表紙：金原由佳

龍石寺にあるお稲荷様です。白いキツネは寄進されたものなのでしょうか。同じものが何体も並んでいました。この写真は表紙写真よりも少し離れて撮影したものです。

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

- 44 FIELD・NOTE NEWS
- 42 ムササビ観察日記
- 40 星空が教えてくれたこと
- 38 飯はく製は生きている
- 36 都留お庭訪問
- 34 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第27回  
旧暦に登場する春の生きもの
- 33 センサーカメラが写した動物たち

# FIELD MAP



4

尾県郷土資料館  
p.19-21  
ここに建っている



特集内記事



特集外記事

7

遠藤先生のお庭  
p.36-37  
都留お庭訪問

2

八起飯店  
p.10-12  
連載 最終回  
「ムジン」は今……  
よんくみめ 名前のない無尽会のかたのお話



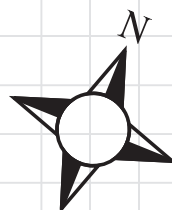
5

えっこさんのお宅  
p.26-28  
あの人の尊敬する人 最終回  
佐藤悦子さんー尊敬する人される人の関係ー



1

細野  
p.8-9  
消えてしまうわけは



5km 4km 3km 2km 1km 0



7 大富祢荘  
p.36-37  
都留お庭訪問

6 レストラン鎌倉  
p.30-32  
「レストラン鎌倉」という場所 前編

8 うぐいすホール  
p.40-41  
星空が教えてくれたこと

3 下小野  
p.16-18  
祭りを続ける思い  
ー下小野の道祖神祭ー

特集

ひもと

# 変化を繙く

—文化と人とその時代—

文化はそこに暮らす人々の手によってうみだされ、  
継承されます。

人がいるからこそ成り立ち、  
人が伝えるからこそ変化していく。

名前、目的、やりかた……。

その文化によって変わりゆくものもあれば、  
変わらないものもあります。

四月二十  
七日



私たちはその両方に着目することで、  
より、文化に起きた変化を  
知ることができるのではないかと考えました。

今号では、変化ということに注目し  
私たちの気になった都留の文化に迫ります。







ちゃんちゃんこを着ていたことから、「ちゃんこのおぼさんの家」と呼ばれ、そのうち家自体が「ちゃんこ」と呼ばれるようになったとか。そんな簡単に決まってしまうものなのか。わたしが驚くと、「おかしいよねえ」と弘子さんは笑いながらおっしゃった。残念ながら「ちゃんこ」の家はもうなくなってしまうそうだ。

屋号というものは堅苦しくて難しいものだと思いますけど、話を聞いてみるとなかにか家自体についたあだ名みたいだ。

## 消えることと変わること

細野の屋号については、陽さんのほうが詳しく知っているそう。陽さんは生まれたときからずっと、細野にお住まいだ。屋号がいつごろから呼ばれたのかをお聞きすると、「それこそほんとうに昔、江戸、大正、明治とかだね」という答えが返ってきた。

いつのまにか誰かが呼び出したものが自然に広まって定着することがほとんどなので、明確にいつと言えるものではない。ただ、古い屋号が今も呼ばれているのは、それだけ地

域に根づいているからだろう。

15年ほど前に細野に越してきた家が「屋号がほしい」と自分たちで屋号を決めたが、地域に馴染まなかったのか、その屋号を呼ぶ人はあまりいないそう。お二人も「なんていうんだっけ、ちよつと忘れちゃったね」とおっしゃっていた。

なんでも新しいもののほうが必要とされ、古いものは淘汰され消えていくのだと思いついていただけ、決してそうとは限らないことに気づかされる。

新しいものだって使う人がいなければ、すぐになくなってしまうことだってある。逆に言えば、古いものでもそれが必要としていた



細野川は「上河原」などの屋号が決まる基準になった

り、どこかいいところを見出している人がいれば、消えることもないのだ。

消えてしまうことや変わってしまうことを、今までわたしはどこか悪いこととしてとらえていた。それは当時の様子をじつじつに見ることができなくなってしまうのが寂しいからだ。だけど変化したことにも、消えてしまうことにも必ず経緯や理由がある。わたしは屋号のお話についてそう気づいたけれど、屋号以外の慣習にも、それは言えることだと思う。

どんなに昔から使っていたものでも、いざれ使えなくなるときは来る。そうになると、使われないものを溜め込んでおくことはできない。名残惜しくても思い切って捨てることになる。文化も似ているのかもしれない。文化はその時代、その場所に暮らす人々に応じて姿かたちを変えていく。使う人、必要とする人がいなくなれば、消えてしまうこともある。でもそれが自然なことなのだと思う。

これからは変わったことを寂しいとばかり思わずに、そこまでの経緯に目を向け、変わることを受けとめたい。

連載 最終回

## 「ムジン」は

# 今……

よんくみめ 名前のない無尽会のかたのお話

「ムジン」って知ってますか？

山梨県に続く文化のひとつです。

尽きることが無い、と書いて「無尽」。

この連載では、刻々と変化を遂げ続けている、無尽の今を追います。

連載も今回でいよいよ最終回。

最後は、これまでで一番お若い無尽会のかたがたに

お話をうかがいました。

別符沙都樹（国文学科3年） 文・写真



場所は前回と同じく『八起飯店<sup>やおきはんでん</sup>』。今回お

話を聞いたのは、そこに毎月第二土曜日に集まる無尽会のかたたちだ。

11月8日の夜、お店に入って左手側の座敷の襖を開けると、その無尽のかたたちはすでに集まっていらつしやった。座敷の真んなかにある机を囲むように10人ほどのかたが座つていらつしやる。月に一度という貴重な時間にも関わらず、みなさん快くお話を聞かせてくださった。

### 集まれるということ

無尽は桂高等学校の同学年で立ち上げたものだそう。平均年齢49歳と今までお話をうかがったかたたちのなかで一番お若い。それでも、みなさんが18歳のころから始めたため30年近く続いているという。なかには幼稚園からの幼馴染というかたたちもいらつしやり、付きあい自体は45年ほどもあるというのだ。そんなに長い付きあいの幼馴染なんて滅多にいないだろうと羨ましく思った。16人で立ち上げた無尽は今でも12人で続けられている。



無尽で集まる場所は、『八起飯店』で5件目だという。それまで転々と場所を変えて集まってきた。お店を変えるのはお店が潰れてしまうなどの理由があるそうだが、こちらには10年以上集まっている。さぞや居心地がいいのだろう。後ろ手をつき、くつろいだようすで足を伸ばしたり、和気藹々<sup>あいあい</sup>とお話されたりしているのを見ると、これがこの無尽のいつもの雰囲気なのだろうと分かる。

### 名前がない

私がお話を聞くなかで何より驚いたのは、この無尽には名前がついていないということだ。それでは何とお呼びすればいいのだろう。最初は戸惑ってしまったが、お話を聞いていくうちにどうして名前がないのか腑に落ちた。

そもそもこの無尽自体が、無尽を作ろうとして始めたものではないという。途中から無尽文化を知ったというかたもいらつしやった。そのため、この集まりの発足後に規則が決まっていたそう。





「ストレス解消」「言いたいこと言える」「そのぐらいしか余暇がない」と次々に出てくるみなさんの率直な思い。お話を聞くなかでも、同級会の延長、といった言葉にはつとした。

私の年代にも同級会はある。はてその集まりに名前があるだろうかと考えたとき、何となくみんなが勝手に呼ぶ名前はあるものの、ぼんやりとしていて決まったものがないことに気がついた。

これまでの取材からも、無尽は名前があるものと勝手に決め込んでいた。しかし、何かの集まりを作るとき、名前をつけないのはそんなに特別なことではないのかもしれない。この所属する集まりに名前をつけないという感覚は、私にも共通してあるものだと思うた

からだ。

今まで取材をしてきたかたちも、同級会のような、ということはおっしゃっていた。ただただその言葉を聞き流していたのだ。けれど、これは重要なキーワードなのかもしれない。今までお話をうかがったなかで一番自分に近い年代の無尽だから、こういった共通する感覚があるのではないだろうか。

### 息づく文化とこれから

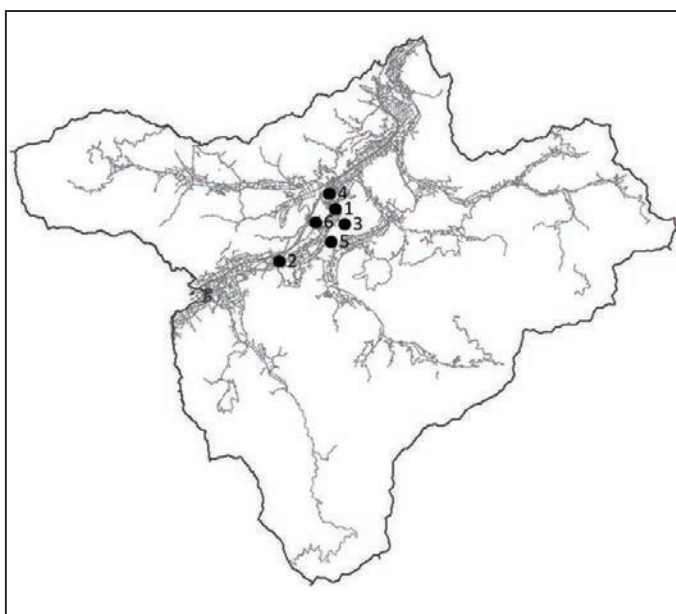
今まで無尽に関わるさまざまなお話を聞くなかで、無尽文化はどうも自分のもっている感覚と距離があり、私より上の世代の人たちがおこなっている文化だと感じてしまっていた。しかし、無尽の感覚は自分にも流れているものかもしれない。

文化は変化する。ときには名前を変え、主となる活動内容を変え、息づいている。途中で姿を消すかもしれないし、ずっとずっと続くかもしれない。私はお話を聞くなかで、無尽とは何なのか、一言で表せるものが見つかるのではと期待していたが、そもそもそう

いったものはないのではないかと考えるようになった。無尽文化は、年代ごとに多種多様な姿を見せる。その年代ごとの定義をもつ無尽を見つけることはできるかもしれないけれど、年代を越え、これと言いつけるべない一本の軸はないと思う。今思うのは、無尽は私よりも年長のかたがたで終わる文化ではないのではということだ。

私は名前がない理由になるほどと思った。私にも共通するこの感覚は、まだ無尽と呼べるものの主となる要素ではないかもしれないが、その一端に自分も触れていると知ることができた。自分のなかにも無尽に繋がる感覚があるかもしれない、無尽文化を共有できるかもしれないというのが嬉しかった。

その年代ごとの無尽はある。しかし、それは変化していくものだ。名前が変わるかもしれない。おこなうことも変わるかもしれない。無尽は、上の世代で変わり切るものではなく、私の代に伝わったとしても変化の余地が十分にあるものなのだろう。無尽とは何だ、たのか？ ではなく無尽とは何なのか？ を、私はこれから探していくことになるようだ。



地図中の番号は写真番号に対応する

## 都留の文化の移り変わり

ミュージアム都留と都留文科大学地域交流研究センターの共同事業である「わたしとあなたの都留アルバム」事業は今年で4年目を迎え、市内から数多くの写真が集まってまいりました。ここでは文化の変化を収集した地域のお祭りや風習の写真をお伝えします。

森屋雅幸・知念浩生（ミュージアム都留）＝文・写真  
古写真はミュージアム都留提供



昭和30年（1955）撮影



平成25年（2013）12月24日撮影

### ①田町での七夕祭り

左は、田町（現在の都留市駅周辺）での七夕祭りを撮影した写真。七夕祭りは昭和40年（1965）ころにはおこなわれておらず、短い期間で催された。



平成6年（1994）1月撮影



平成25年（2013）12月24日撮影

### ②梵天竿<sup>ぼんてんざお</sup>

十日市場のガソリンスタンドの前で道祖神の依代<sup>よりしろ</sup>（神霊が寄り付くもの）となる梵天竿を撮影した写真。道祖神祭は現在も市内各所で1月中旬ころにおこなわれている。



昭和 33 年（1958）撮影



平成 25 年（2013）10 月 17 日撮影

### ③「にわか」

八朔祭の出しもの「にわか」の仮装をした人々を円通院の前で撮影したもの。「にわか」は「にわか狂言」の略で、祭礼において種々の趣向をこらした出しものを演劇化した即興の笑劇である。現在の八朔祭では屋台と大名行列の巡行が中心となり笑劇はおこなわれていない。



昭和 2 年（1927）撮影



平成 25 年（2013）12 月 5 日に撮影

### ④献上米の儀式

左は、献上米の儀式で、地元の人たちが田を耕している様子を撮影したもの。献上米は宮中で毎年 11 月 23 日におこなわれる新嘗祭に伴い全国の都道府県から献上されるものである。撮影場所は現在の都留インターチェンジのあたりで、むかしは一面田んぼだった。



昭和 40 年（1965）8 月 7 日撮影



平成 25 年（2013）12 月 5 日撮影

### ⑤付け祭り

左は、上谷 5 丁目、谷村東側通りにて撮影された上天神町の金山神社の「付け祭り」の様子。「付け祭り」とは祭礼のさいの神輿の巡行に合わせた踊りや芝居などを指す。祭り自体の歴史は浅く、昭和 35、6 年（1960、61）ころから始まり、現在は廃れてしまった。





昭和 43 年（1968）4 月撮影



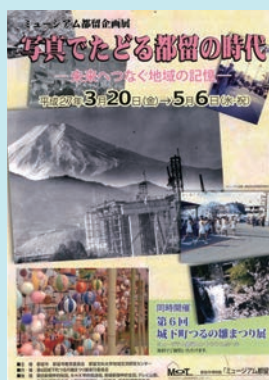
平成 25 年 (2013) 12 月 11 日撮影

#### ⑥勝山城跡

川棚の勝山城跡（お城山）の山頂の様子をおさめた写真。この当時、谷村では4月3日にお寿司などをもってお城山に登って食べる風習があったようだが、今は廃れてしまった。

◇遠藤周作の次の言葉が頭に残っています。「廃墟は踏絵のその眼のように人間の人生や心をじっと見てきた墟（あと）である。」（遠藤周作著『狐狸庵閑話』、2001 年、新潮社、P.76）ここでご紹介した写真に写るのは、地域のなかでほとんど見られなくなってしまったお祭りや風習であり、遠藤周作の言う廃墟といえるでしょう。写真はその場が見てきた人間の活動の一部を私たちに伝えます。そして私たちの生活する空間は、過去の人々が生きた時間と重なり合い、その上に成り立っていることに気付かせてくれるでしょう。だからこそ、写真がもつ情報を丹念に拾い集め、その情報を確実に後世に伝えていく必要があると考えます。「わたしとあなたの都留アルバム」事業はこうした使命を背負っていることを自覚し、引き続き取り組んでいきたいと思います。（森屋）

## お知らせ



## 企画展を開催します！

ミュージアム都留では、都留文科大学地域交流研究センターと連携した企画展、「写真でたどる都留の時代—未来へつなぐ地域の記憶—」を開催します。開催期間は、3月20日から5月6日です。今回の展示では、市内で集めた写真を、国内や市内の出来事をまとめた年表に沿って並べ、写真が撮影された時代の移り変わりをわかりやすくお伝えします。

お問い合わせ先は、下記までお願いします。

ミュージアム都留：0554-45-8008

都留文科大学地域交流研究センター：0554-43-4341

## 祭りを続ける思い —下小野の道祖神祭—

都留の各地でおこなわれる、小正月の行事に道祖神祭がある。道祖神祭はどうしておこなわれるのか、どういうふうにおこなわれるのか気になった私は、道祖神祭に関わる人にお話をうかがうことにした。

道祖神祭は、道路の悪霊を防ぎ、村や旅行者の安全を守る道祖神を祀った行事だ。1月14日、15日の小正月前後におこなわれるのが一般的で、梵天竿と呼ばれる大きな飾りなどを立てたり、正月飾りやしめ縄を焚くどんど焼きがおこなわれたりする。都留だけの祭りだと思っていたら、地域のかたから全国的にあるものだと教えていただいた。

都留では多くの地区で道祖神祭がおこなわれており、その地区ごとに梵天竿も少しずつ変化がある。私はこれまで十日市場ののしか見たことがなかったもので、ほかの地区の道祖神祭が気になっていた。

そんなおり、ミュージアム都留でおこなわれた道祖神祭に関する講習会でご紹介いただいたのが、今回お話をうかがった武井邦夫さん(72)。小野にお住まいの武井さんは、小野熊野神社の神楽保存会のかたで、道祖神祭についても詳しい。小野は上小野、中小野、下小野と地区がわかれており、地区にある組ごとに道祖神祭をおこなう。武井さんがおもに関わっているのは下小野の道祖神祭だ。

### 祭りのはじめかたと終わりかた

1月24日、武井さんにミュージアム都留でお話をうかがった。私は、以前から気になっていた道祖神祭の工程について尋ねた。

梵天竿が作られるのは1月13日から。祭り当番の人たちが公民館に集まり、色紙で飾りを作る。また、道祖神の祠を持った組の人たちが家々を回り、ご神物を集めたり手ぬぐい

や扇子をもらったりして、それも飾りに使うという。今では扇子も手ぬぐいも減ったそうだが、昔はいろいろなお店が、商売繁盛と宣伝を兼ねて、店名入りの手ぬぐいを出していたそう。夜には子どもたちがやってきて梵天竿に飾るための習字をし、みんなでご飯を食べ、お菓子をもらって帰る。

14日になると、杉の木を切り出して作られた30メートルある竿に竹を十字に結わえ付け、飾りの付いた素縄を、竹と竿に菱形に掛けていく。

竹の長さや飾りの付けかた、飾りの種類、色も地区ごとに違い、個性がある。十日市場地域の梵天竿は、飾りに三角形の布を縫い合わせたものに綿を詰めたヒイチを多く使うが、下小野は紙の飾りがほとんどで、ヒイチはあまりない。下小野では3件のお宅が今もヒイチを作っているそうだが、昔よりだいぶ減ったのだという。

飾りを付け終わると、菅野川沿いの岸に梵天竿の根元を固定し、みんなで縄を引っ張り立てる。立てるまでにだいたい2〜3時間程度かかるそう。作りかたや立てかたは昔からほとんど変わらないが、ホームセンターな

## 【下小野の梵天竿と飾り】

吹き流し

紙の飾りと同じ色で作る。子どもたちが障子紙に「天神様」と書くもの。それが天へ上がると字が上達するという

紙の飾り

赤、青、緑、黄、紫の5色が使われる。地域によって白や桃色が加えられることもある

ヒイチ

「ヒーチ」「火打」とも呼ばれる。火打ち袋をあらわし、火除けの意味がある

おしめ

鏡餅の下などに敷く三方の紙で作られた幣束。3本ある竹の先にそれぞれ付ける

「道祖神」と書かれた2枚の扇を円形になるよう飾る。中央にはお多福のお面を掛ける

道祖神を祀った祠。「集めっこ」のさいに、組の人が持ち歩く

支えに使われる12本の縄は十二月を表している。うるう年には1本増える

### 祭りの楽しみ

武井さんに道祖神祭の思い出をお聞きする。武井さんは「子どもたちのころは、縄を持って竹のところに回して掛けて、飾りがいくつ取れるかとかやったね。あと、昔だし、

どのおかげで材料の調達は昔より格段に安く、楽になったという。夜にはどんと焼きがおこなわれ、その火で団子を焼いて食べると病気になるといういわれがある。

梵天竿は16日まで立てられ、祭りが終わると解体される。飾りの付いた縄や竹などは、欲しい人がもらっていく。昔は競りやくじ引きでもらうものを決めた。武井さんはいつも飾りの付いた縄をもらうと、魔除けとして玄関に飾っておくそうだ。ほかにも、竹をもらった人は、それを、刈り取った稲をかける稲木に利用していたという。

昔は12日に立て、17日に倒していたが、今では5日間立てておくのは難しい。この時期は風が強く管理が難しいことや、人手不足もあり、立てるだけ、お祭りをするだけで精一杯だと武井さんはおっしゃっていた。



川岸でやるもんだから、（どんど焼きの）焚き火のなかにまだ火の残ってるのがあって。それを川原で拾った石を竈<sup>かまど</sup>みたいに積んだところへ入れて遊んだね」と、いたずらっ子のような笑顔で話してくださった。

道祖神は子ども好きな神様で、子どもがするいたずらは怒らないといわれる。そのときの子どもたちの姿を想像すると、微笑ましきとともに、祭り独特のおおらかさを感じる。今ではそういう遊びをする子どもはいないそうで、祭りへの親しみかたも変わっているのかもしれない。

祭りが終われば地域の人たちで集まってお酒を飲む。昔はそれと一緒に子どもたちに煮物やお菓子配っていたので、それも楽しみだったとおっしゃっていた。

## 祭りが続いていくのは

道祖神祭が生まれた経緯ははっきりとしない。純粹に道祖神を祀るためという説や、山の神様を迎えるための準備という説など諸説ある。

「人間が生まれてから死ぬまでの繁栄を願っ

てやりはじめたのかもわからないね」

武井さんは道祖神祭のはじまりをそう表現された。たとえば、祭り当番の組の人たちが、祠を持つて家々を回り、ご神物を集める「集めっこ」。このとき、組の人々は「べっこんべっこん、だせやいだせやい」と言いながら回るそう。とくに、赤ん坊が生まれた家では「あかだせ」、お嫁さんをもらった家の前では「よめだせ」と言う。そうした家は自分たちを守る神様へのお礼としていつもよりご神物を多めに用意しているのだとか。

また、祭りをおこなうさい、当番の組に不幸があつたときは、その年の当番を外され、次の当番の組が代わりに請け負うことになっている。それは、なにかあつたときにも変わらず祭りを続けていくための決まり事なのだろう。

祭りの準備はほとんど一日仕事だ。そのぶん、一緒に作業をしたりご飯を食べたりすることで村内の親睦を深めることにつながる。冬の閉農期におこなわれるこの祭りは、人々にとつて楽しみな行事だったはずだ。今は会社に勤めている人も多く、みんなが祭りのために休みを取れる＋わけではない。楽しく

ても、祭りを続けることが負担になることもある。けれど決して祭りをやめないのは、どこか心に「なにかあつたら」という畏れがあるからだ。と武井さんはおっしゃっていた。

## 信仰と安心と

特定の神様を信仰するうえでおこなわれる祭り。それが何十年、何百年と続いていく根底には、祀る神様への信仰が強くあるのだと思つていた。けれど、お話を聞くなかで、武井さんがたびたびおっしゃっていたのは「なにかあつたら怖いから」ということ。道祖神を信じていないわけではないだろうけれど、信仰というより、安心のために、というのが、今の祭りを続ける大きな理由だ。私も、なにかの祈願や初詣には決まつた神社へお参りに行つている。それは信仰心より、決意表明や自分への元氣付けというほうが近い。

そこへ行くことで、それをすることで、なんだか安心する。ふだん、取り立てて信心深いわけではない私にも、そのなんだかわからない安心感はある。その安心感が、祭りを伝え、繋げていく核なのかもしれない。



## ここに建っている

小形山にある、<sup>おがた</sup>尾県郷土資料館。もとは小学校として使われていた建物だ。  
ふと、どうしてここに？ と首をかしげたくなるのは、その姿がなんだかまわりの  
のどかな景色と合っていないような気がしたから。  
けれど、そこにはこの場所にあるからこそ見える景色、流れてきた時間があった。

長尾泉（初等教育学科 1 年）＝文・写真  
南條新（初等教育学科 1 年）＝写真



バルコニーに吊るしてある太鼓。資料館になる前は、これをたたいて時を知らせていたそう

1月31日、私は尾県郷土資料館を訪れた。少し茶色がかかった赤色の屋根、白壁、そして明るい水色のバルコニー。ぱっと目を引くその外観はまるで物語の世界に迷い込んだかのようなのだ。

## 建物の昔と今



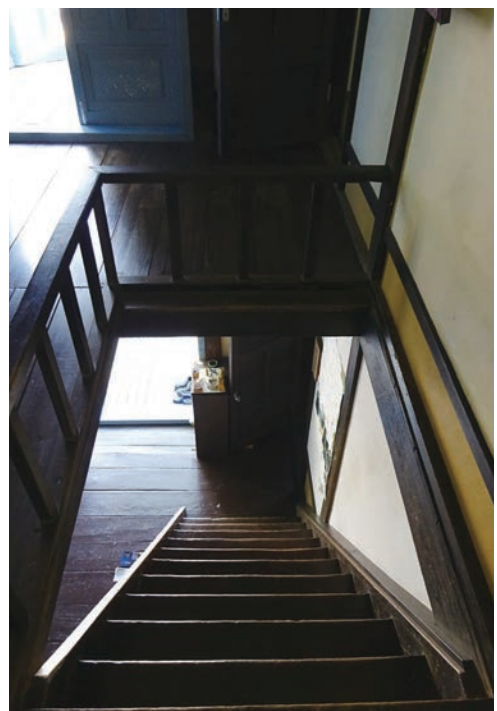
この資料館は一階と二階に展示室があつて、小学校の校舎だったころの教室のようすや昔の教科書、地域の写真などが展示されている。ここは今、おもにこの地域の暮らしや慣習について知ることができる場になっているのだ。

お茶とお菓子で出迎えてくださったのは館長をされている山本恒男さん（79）。山本さんに建物のことをうかがうと、藤村式という日本人の建築家が洋風の建物をまねて造った建築方式のものなのだという。小学生だったころ山本さんもここに通われていたそうで、身振り手振りをまじえ、笑いながら当時の思い出をたくさん聞かせてくださった。今の建物にはもうないが、二階から霧よけ（一階と二階のあいだにある小さく突き出した屋根の

ような部分）に出てそこからグラウンドに飛び降りたり、夏休み中には桂川で泳いだりしていたという。今聞くとびっくりしてしまうような話ばかりだった。「授業と言うよりのんきな学校だったよ」という言葉がとても印象に残っている。山本さんのお話を聞いていて、きつと机の前はずっと座っているような学校ではなかったのだろうなと想像できた。この建物のまわりは自然が豊かだ。そのなかに建つていたことが、子どもたちのびのび過ごせる学校になった理由のひとつなのかもしれない。

廃校になってから資料館になるまでのあいだも地域の人が自然と集まる、いわばたまりのような場所になっていたのだそう。今では地域の人以外にも、近くの山に登ってきた人がふらつと寄っていくこともある。そんな人たちに山本さんは「お茶でも飲んでくかい」と声を掛ける。

山本さんは私に一通の手紙を見せてくださった。それは東京から訪れたというかたからの手紙。そこには、資料館のことを説明した山本さんへの感謝の言葉が書かれていた。



二階へ上がる階段。降りるのが怖くなる高さや角度だ

山本さんは声を弾ませてその人のこと、その人とどんなお話をしたのかを教えてくださいました。資料館を訪れた人のことをちゃんと覚えているのだ。そうやって出会いを大切にしているからこそ新しくできた繋がりは続いているのだなと思い、私まで笑顔になった。山本さんがこれからも私のことを覚えていてくれたらいいな、そう心のなかで考えている自分がいた。

最後に、山本さんがこの建物で好きなところはどんなところかお聞きすると、間を空けずに「それはもう大勢の人と話ができることだよ」と答えてくださった。小学生が見学に来たり、訪れた人との新しい交流が生まれたら、そういうことが結構楽しみと、子どもたちからの寄せ書きを見せてくれながらおつ





笑いながら小学校のころの思い出を話す山本さん

しやった。「ここにいなきやこういうチャン  
スはないからね」とも。

#### 館内探検



お話を聞かせてくださったあと、山本さ  
んは館内をていねいに案内してくださった。  
入ったすぐの階段を上った二階の展示室で  
は昔遊びのおもちゃを使つてじつさいに遊  
ぶことができる。その向かい側の水色の扉  
を開くとそこはバルコニーだ。こんな素敵  
な建物が小学校だったなんて、とうらやま  
しく思つてしまう。

今までは二階の展示室とバルコニーまでし

か行つたことがなかったのだが、なんとその

日、特別に建物のてっぺんに入らせていただ  
いた。急勾配の階段をそろそろと慎重に上がつ  
ていく。そこは狭い屋根裏部屋のようなところ。  
薄暗かったが、山本さんが窓を開け放つ  
といつきに外の光が差し込んだ。窓の外は一  
面の雪景色で、小形山周辺を見渡すことがで  
きた。広々とした畑のなかに家が小さく見え  
る。その奥には雪をかぶつた山。思わず窓か  
ら体を乗り出してしまふ。こんな場所があつ  
たとは。ここをたくさんの人に知ってほしい  
ような、はたまた自分だけの秘密の場所にし  
ておきたいような不思議な気持ちになった。

#### ここにあること



資料館を訪れる人はまずその魅力たつぷり  
の外観に引き寄せられ、そして山本さんとお  
話してさらにこの建物のとりこになつていく  
のかもしれない。そして帰るころになると帰  
るのが惜しくなつて、きつとまた来よう、と  
思う。私もすでにそのうちの一人だ。

私は初めてこの建物を訪れたときに色鮮やか  
な外観を見て、こんなのどこかなところにあ

ることに驚いた。この場所にあることが少し  
場違いな感じもしていたのだ。けれど、何度  
か足を運んだりお話を聞かせていただいたり  
して、あらためて建物を見上げてみたとき、  
すつとまわりの景色と馴染んで見えた。それ  
は正直に言つて見慣れたこともあるのだろ  
う。でもそれ以上にこの場所に建つていてよ  
かつたと思つたからだ。もし、別のところ  
にあつたら今とまったく違つたものになつてい  
たかもしれない。人が自然と集まるなんてこ  
ともない、ただ歴史的に重要な建造物になつ  
ていたかもしれない。

ここに建つているからこそ生まれるつきあ  
いがある。つい足を止めてなかに入つてみた  
くなるような雰囲気がある。それは、建物と  
そこで時間を過ごしてきた人たちがじつくり  
とつくつてきた替えのきかないものだ。

小学校から資料館へ。のんきな学校に人  
はつどい、そして今も訪れる人をあたたか  
く迎える。長い年月を経て深みのある茶色  
になつた階段や柱、ほこりのない床。至る  
ところから、愛着をもつて大切にされてき  
たことが伝わってくる。この建物は今、と  
ても幸せそうだ。

## 特集まとめ

すべてが変わり、  
跡形もなくなっていたら  
途絶えてしまったかもしれない文化。



けれど、文化が途絶えそうになるときも  
繊維を足すことを繰り返して糸を紡ぐように  
新たな呼び名、習慣、考えといった要素が足されて  
続いていくのです。

その時代や人の営みに合わせ紡がれていくさまは  
まるで生きものの進化のよう。

文化は生きている。

人がいることで生き続け

今私たちがいるこのときも

文化はまさに変化の真つ最中なのです。

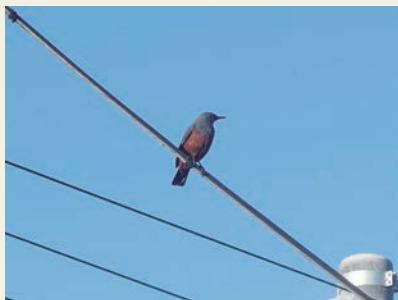




# フィールド暦

雪が積もり、景色ががらっと変わる冬。  
1月から2月に都留市で見つけた生き  
ものや足跡を紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



イソヒヨドリ

2015年1月17日 谷村

都留市のような山地でも見られますが、名前の通り、海岸の岩場などにも生息しています。



コシマゲンゴロウ

2015年2月3日 十日市場

1 cmくらいの小さな水生昆虫。中屋敷にある池で泳いでいました。泳ぐだけでなく、飛ぶこともあります。



オオイヌノフグリ

2015年2月3日 十日市場

淡い水色がきれいな花。3月ごろに道端でよく見かけます。この花を見つけると春の訪れを感じます。



ルリビタキ

2015年2月6日 上谷

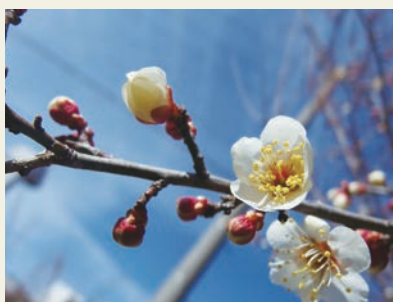
明け方に金山神社の近くにいました。背中羽毛がうっすら黄色をしています。冬毛だからか、丸まるとして見えます。



フクジュソウ

2015年2月11日 本学自然科学棟前

山間部に咲く花で、山吹色の花弁が目を引きまします。去年も同じ場所に咲いていたので、来年もまた咲くかもしれません。



ウメ

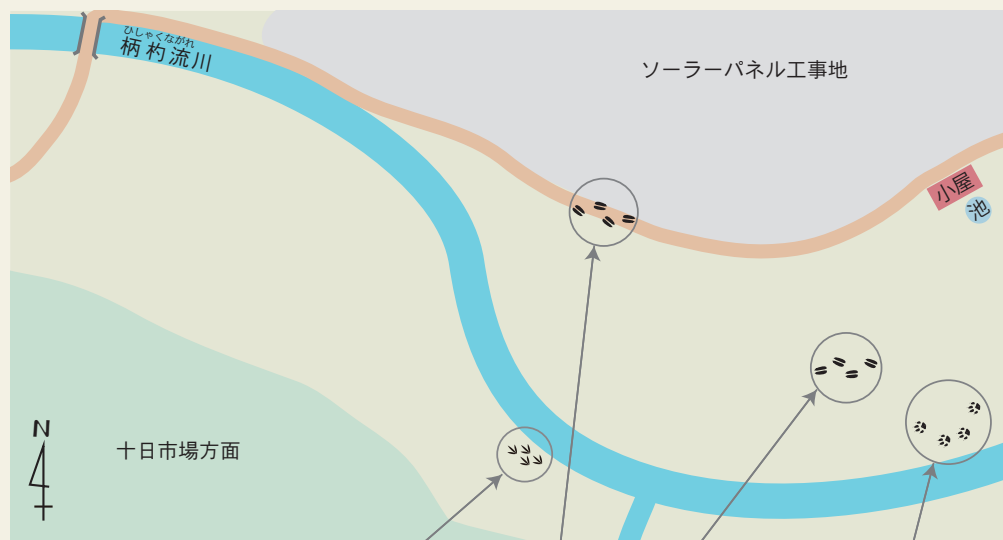
2015年2月15日 上谷

ウメの花がちらほらと咲き始めました。薄いクリーム色の花弁が開ききるのが楽しみです。

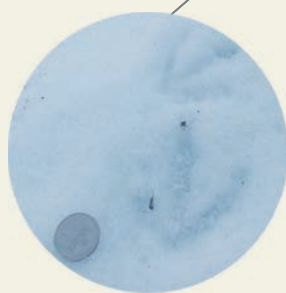


## 雪に残った足跡

1月18日に川棚の中屋敷フィールドで見つけた、生きものの足跡を紹介します。



中屋敷フィールドの地図



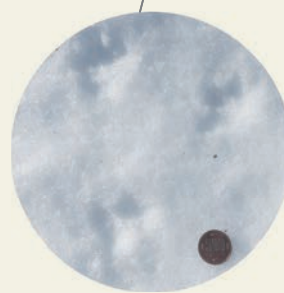
### 鳥の足跡

くっきりと3本の爪跡が残っています。河原にあったので、水鳥でしょうか。



### シカの足跡

橋を渡って小屋へ行く途中の道にありました。足跡は小屋の前にもありました。



### 小型哺乳類の足跡

川沿いの堤防の上にあいました。キツネやタヌキのものだと思います。

※足跡は500円玉と一緒に撮影しました。500円玉は直径およそ2.5cmです。



最終回

# あの人の 尊敬する人

佐藤悦子さん  
—尊敬する人される人の関係—

さまざまなかたのお話を聞いていると、  
欠かさず現れるのがほかの人との出会い。  
出会ったことになった。  
生きかたがかったこよくて自分もこうした。

私の尊敬している人にもまた、  
尊敬している人がいたのだ。  
私が出会ったあの人が  
すてきだと思う人はどんな人だろう。

この1年間に会った4人のかたがた。  
みなさんの関係のなかに  
共通して見えたものがあった。



ショートカットの髪に茶色のスカーフ。少し遠くでここにこしながらこちらに手を振るのは佐藤悦子さん(37)。あまりにも満面の笑みを向けてくださるので、近づくの待たずに、とつさに声を張ってあいさつをした。お話をうかがうため私がやって来たのは、ご自宅近くの高尾神社。佐藤さんは、わざわざご自宅からこちらまで迎えに来てくださったのだ。

佐藤さんは周りの人から「えっちゃん」「えっこさん」と呼ばれている。明るくて気さくな方ですから、そう呼びたくなるのもよくわかるし、それを聞いた私も、親しみを込めてえっこさんと呼んでいる。

尊敬する人としてえっこさんを紹介してくださったのは、カフェナチュラルリズムを営むヒコさんこと若林英行さんだ。わかばやしひでゆきヒコさんとえっこさんの出会いは今から7年ほど前。当時、東京でカメラマンのお仕事をされていたえっこさんが出張で山梨に来たさい、ナチュラルリズムを訪れたことがきっかけだ。カフェを気に入ったえっこさんは、それから仕事がなくとも、暇ができれば通うようになったという。えっこ

さんはナチュラルリズムを「ただのカフェじゃない。もう家族。家ですね」とおっしゃる。このように言うのもおふたりが親しい間柄にあるから。それを表す出来事のひとつが東日本大震災だ。

震災後、世間が混乱に陥ったとき、なんとえっこさんは、ナチュラルリズムでお子さんと2週間のテント生活を送っていた。後になつて子どもに何かあったとき、自分が何もなかったことで後悔したくないという思いから、テント生活を決意。ヒコさんに連絡したところ、ふたつ返事で了承してくださったそうだ。誰かがこう言うからではなく、えっこさん自身のものさしで物事を考え、それに基づいて行動を起こす。ここに、えっこさんの芯の強さを見た気がした。

### ここでなんかやりたい

テント生活を送っているあいだ、えっこさんは新聞に掲載された一枚の写真を目にする。それは、まだ小さな女の子が、両親が亡くなっていることを知らずに、両親への手紙を書きながら眠ってしまった写真。

その女の子のほおには涙が伝っていた。これを見たえっこさんは思った。「ここ(ナチュラルリズム)でなんかやりたい。みんなが笑うような。子どもの笑顔がないとやっぱ未来はないな」。

こうして考えられたのが、東日本大震災の復興チャリティイベント「ルナソル」だ。この名前には、太陽と月のような子どもという意味が込められ、大人も子どもも楽しめるイベントが多く企画された。クラフトに講演、ライブ。坂を利用して流しそうめんをしたり、川に舟を渡したり、子どもが入れる五右衛門風呂を設置したり。これを聞いて、思わず私は「楽しそう」と口にしていった。参加する人、企画する人どちらの気持ちになってもそう思う。なぜなら、「ルナソル」のお話をしていくときのえっこさんはいつでも笑顔だったから。誰かを楽しませるイベントをまずはえっこさん自身が楽しんでいたので。

笑顔で話すえっこさんを見ると、思い悩むことなどないかのように思ってしまう。えっこさんのお話には、つらかった話や苦労した話がほとんど出てこないのだ。けれど、それは決して悩んでいないわけではなくて、

そのようすを見せないだけだった。

じつはえっこさん、イベントを企画するのは初めてだったという。ただでさえ何かを企画することは苦勞が絶えないのに、初めてであれば、なおさら大変なことも多かっただろう。それならば、苦勞話が出てくるのだろうか。思い尋ねてみても、代わりに話してくださいのは、イベントに協力してくれた人の話やそのかたがたへの感謝の気持ちだった。

五右衛門風呂あつたらなとナチュラルリズムで言ったところ、その場にいた人が、作ってやるよと声を上げてくれた話。暑いなかイベント当日のようすを記録するため、カメラの故障があつたにもかかわらず最後まで撮影しきってくれた知人の話。イベント企画の経験もあるヒーコさんは、実行にあたって必要



「ルナソル」のチラシ。2015年5月23日24日には大月ピラミッドセンターで第3回目のルナソルがおこなわれる

なことを一から助言し手伝ってくれたという。えっこさんは言う。「助けてくれた人とか、もちろんヒーコさんだし、やつぱ苦しいときに助けてくれた人たちは絶対一生忘れない」。自分の苦勞を話すことよりも周りの人にお世話になったことを話すえっこさん。そんなえっこさんだからこそ、手を差し伸べたくなるのだろうか。

### 尊敬する人される人

「尊敬する人とか言われても何言つてんのみたいな。こっちなんですよ」。えっこさんは笑いながらおつしやった。ヒーコさんの尊敬する人ということで、えっこさんを紹介していただけだけれど、えっこさんもまたヒーコさんを尊敬していた。これは、おふたりに限ったことではない。今までお話をうかがったみなさんが、「むしろこちらが尊敬している」と言い、お互いを尊敬し合っていたのだ。

尊敬する人される人は、一方的に敬う先生と生徒のような関係ばかりを思い描いていた。けれど、おふたりのように、じつさいに行動をとる同志のような関係もあった

のだ。先生のような存在であれば、自分には手の届かないはるか遠くにいて、違う世界にいるようにさえ思えてしまう。けれど近くにいて同じような目標や思いをもつ存在だからこそ、身に染みてすごいと思えるのかもしれない。

私の尊敬する人をきっかけに始まった連載だけれど、今の私にとっては、出会ったすべての人が、誰かに紹介したいと思えるすてきな人がたがただ。みなさんにお話をうかがうと、当時の思い出や出来事を描き出すかのように詳しく教えてくださる。それを聞いていると私は、まるで自分もその場にいて、一緒に見てきたひとりであるかのような気持ちになっていた。そのときいつも私には、考えていることがある。それは、「自分ならどうするだろう、自分にはできるかな」ということ。知らず知らずのうちに、その人に自分を重ね合わせていたのだ。こうやって自分というフィルターを通してその人をのぞいてみる。すると、ぼんやり「すごい」とだけ思っていたものに、実感がわき感動が増して、今までよりずっとその人がすてきに見えるのだ。

# ビオトープ だより 冬 no.04

本学附属図書館横ビオトープは学生によって整備されています。昆虫の調査などもおこなっており、学びの場としても活躍しています。

伊藤瑠依（社会学科2年）＝文・写真

タイトル写真：黒い斑点が特徴のヒメウラナミジャノメ。ビオトープ内でよく見ることができる

## チョウの調査

春から秋にかけてビオトープにやってくるチョウの種類と数を調べる調査をおこないました。  
西教生（本学非常勤講師）＝写真



**オオチャバネセセリ**  
茶色の翅にところどころ白い斑点がついている。7月11日に1匹のみ観察された



**ツバメシジミ**  
白い翅に黒い斑点。翅のふちには部分的にオレンジ色がついている。日当たりのよい草地に住む



**オオミスジ**  
各地で減少傾向にあるチョウだが、調査中は2度観察できた。黒い翅に白の横縞の模様が特徴的



**ヤマトシジミ**  
薄い茶色の翅の先には、黒の斑点が規則的に並んでいる。調査中にもっとも多く観察された

## わたしたちの活動風景



ヒャクニチソウを植える



プラムを植樹する



手のこぎりで剪定をする

ふだんは<sup>せんてい</sup>剪定や掃除など、植物の成長のお手伝いとなるような作業をしています。夏ごろには、ヒャクニチソウやプラムなどの食べられる実のなる木を植えました。

現在は春に向けて大胆な剪定作業をおこなっています。手作業で余分な枝を切り落とし、切ったものは木の根元に重ねて置きます。こうすることで見た目がきれいだけでなく、生きものの住処にもなるのです。





おなじま食品館の向かいにある道を通ると、ふわりと香ってくるお腹がすく匂いに思わずその出所を探してしまう。

薄黄色の外壁に、木製の扉。扉を引くとカランと鈴の音がなり、目の前に広がるのはレトロな雰囲気の内。長く使用していることをうかがわせる、こげ茶色を基調とした椅子と机、薄い灰色の壁は上から降り注ぐライトの光で暖かみのあるクリーム色に見える。重厚な趣きのあるように一瞬かきこまってしまうけれど、奥から聞こえるマスターの「いらっしやいませ」という明るくて気取らない声に安心する。夕方になると、店内は橙色のライトが際立ち、穏やかな雰囲気へと変わる。



## 「レストラン鎌倉」という場所



そこは洋食のレストラン。  
私はアルバイトとして働いていて、マスターやお客さんの人柄に惹かれた。そんな魅力的な人々が集まる「レストラン鎌倉」という場所は、働く人、訪れる人にとってどのような存在なのだろうか。  
前編では、マスターにとっての「レストラン鎌倉」とはなにかお話をうかがう。

加藤明香（初等教育学科2年） 文・写真



「レストラン鎌倉」を営む中村圭二さん<sup>なかむらけいじ</sup>（52）は、マスターの愛称で親しまれており、お店に出す料理は仕込みから調理まですべて一人でなさっている。今の経営者はマスターだが、「レストラン鎌倉」自体はマスターが経営する前からあり、かつてはご自身もこのお店でアルバイトをされていた。大学卒業後、会社勤めをしていたあるとき、当時経営していたかたがお店を離れるということで、マスターに譲ってくださることになったという。

どうして「レストラン鎌倉」を継ぐことにしたのか。お店を継いだ理由には、もともと料理などを作ることが好きだという気持ちが大きく影響しているという。

お店を継いでからの3ヶ月ほどは、余裕がなく現在よりも忙しく感じたそうだ。それに比べて今は仕事が身に付き、余裕がもてるようになった、とおっしゃるようすは過去の自分を懐かしむようだった。今では忙しいときでもお客さんと会話をしながら調理をしたり、アルバイトのしている作業まで把握していたり、自分以外のことにまで気を配っている。

そんなようすを見ている私からすると、余裕がなかったという当時のようすは想像しにくかった。

### 自分の信じる「美味しい」

働いていて、この料理は美味しいから紹介したい、と友人や恋人と一緒に来るかた、美味しいと噂を聞いて遠方からいらつしやるかたが多いように感じる。帰るときにはみな「美味しかった」と満足した表情をしているから、料理を作っていない私まで誇らしくなる。マスターが作る料理は、思わずだれかに教えたくなるような味なのだ。

この味はどうやって見つけたのか、厨房に立つマスターに尋ねた。すると、味を決めるとき基本となっているのは、これまでに自分が食べてきたものから学んできた味だという。そのなかから、「美味しい」と思った味をお客さんに出しているとおっしゃっていた。

お店に来るお客さんは子どもからお年を召したかたまでさまざま。どうやったら自分

の味が幅広い年齢のかたに美味しいと思ってもらえる味になるのか、さらにお客さんのようすから学んだそう。口に出さなくても美味しい料理は残さず食べるもの。食べ終わったお皿を見れば、その人が満足してくれたのか分かるとおっしゃった。マスターが今までに美味しいと感じてきた味が、「レストラン鎌倉」の味を支えている。

### 相手を認めるということ

このお店ではお客さんとマスターのあいだに多くの会話がある。なかでも常連さんとは話をすることが多い。その内容は、共通の趣味や最近のニュースなどだ。

私はお客さん相手と考えると、相手に好意をもってもらおうと自分の本心とは違うことを言ってしまうときがある。しかし、マスターはお客さんと話すさい、すべて本音で話しているという。それはとても勇気があることだろう。心がけようと思っても簡単にできることではない。



「レストラン鎌倉」創業以来、ずっと使われてきたメニュー表。今日はなにを食べようか、その楽しみがこのなかにつまっている

マスターにお客さんと本音で接する理由をうかがうと、「本音じゃないと相手を認められない気がする」とおっしゃった。自分が感じた通りに、思った通りに接したほうが間違いない、とカウンターで腕を組み、堂々としたようすで話してくださる。嘘の気持ちを重ねていってもいずればぼろつと本音が出てきってしまう。その本音が相手を傷付けるものだったら、今まで築いてきた関係は崩れるだろう。だから本音でいたほうが間違いないと、

言葉を選び出すように話してくださる。それは相手と本気で向き合うという意味だ。

常連さんは、食事をしに来るといふこともあるが、マスターと話をしたくて来るといふかたも多いように見える。お客さんがときおり漏らす、ちよつとした弱音や、嬉しそうにほおを緩ませて話すうちわの話から、マスターに心を許していることが分かった。マスター自身が本音で話すからこそ安心して、お客さんも本音で話そうと思えるのだろう。「本音で話しています」なんて、口に出して言わなくても自然と伝わるものなのだ。マスターは相手の話に関心をもち、聞こうとしている。そのようすから相手の考えを受け入れることができるかたなのだと感じた。その人柄がお客さんのお店で過ごす時間をいつそう楽しいものになっているのだ。

## この場所は

最後に、マスターにとって常連さんがたはどういう存在なのかうかがうと、

「(自分にとって) 人間的に成長できるお客さんが常連さんに多いのかな」

自分でも気が付かなかったけど、と付け加えて今までを振り返るように話してくださった。

「レストラン鎌倉」という場所はマスターにとって、日々の何気ない会話から相手の価値観や考えかたに触れることができる場所なのだろう。そのうちに自分のなかにはなかった新しい捉えかたを見つかったり、自分のなかにもともとあった気持ちを再確認できたりするのだとマスターの言葉から感じられた。

そう考えたとき、働く側としてお店に関わっている私も、この場所に訪れたお客さんと新しい価値観を分かち合える一人なのかもしれないと気が付いた。すると、自然とお客さんのもつ考えや言葉を知れることをもつと大切にしたいと考えるようになった。

## 「レストラン鎌倉」

住所 山梨県都留市上谷5-9-15

TEL 0554-45-1131

定休日 木曜日

営業時間 11時〜22時(21時半オーダーストップ)



## テン



すっかり黄金色の冬毛に生え替わったテン。  
倒木上や道上など目立つ場所で種子や小動物  
の骨などが混じったテンの糞を見かけます  
[2014年11月5日]

## アナグマ



本学の自然科学棟脇の側溝でアナグマが撮影  
されました。側溝は人目にもつきにくいので、  
動物たちの移動に一役買っているようです  
[2014年11月15日]

## ニホンジカ



センサーカメラでもっとも頻繁に撮影されて  
います。撮影されたオスは角が枝分かかれて  
いないため、比較的若い個体と思われます  
[2014年12月1日]

## センサーカメラが 写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、キャン  
パス周辺のフィールドで赤外線カメラ  
を利用した動物の調査をしています。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

## ニホンリス



地上にいるニホンリスが撮影されました。こ  
の時期になると、オニグルミの実をどこか土  
中に埋め「貯食」したのではないかとその痕  
跡を探したくなります

[2014年11月2日]

## イノシシ



鼻先をつかって地面を掘るイノシシの姿が撮  
影されました。秋口の活動は活発でしたが、  
冬が深まるにつれ撮影回数は減りました

[2014年11月2日]

## 旧暦に登場する 春の生きもの

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

西教生（本学非常勤講師）＝文・写真  
加藤萌香（初等教育学科2年）＝イラスト

ウメの花

### 季節の始まり

旧暦の季節は春から始まります。「立春」を過ぎてもまだ寒い日が続きますし、雪も降ります。2月上旬には「立春」の次候に「黄鶯睨皖」（うぐいすなく）が来るものの、この時期にウグイスのさえずりが聞かれるのは西日本などの温暖な地域だけです。都留市では2月下旬から3月上旬にかけて、ウグイスの初鳴きが確認されます。山や河川敷からウ

1年を24等分し、季節をあらわしたものが二十四節気です。さらに細かく、1年を72にわけたのが七十二候です。1つの節気には七十二候の初候、次候、末候の3つが入ります。これらの旧暦は、「立春」や「夏至」などよく耳にする言葉のほかに、「楓蔦黄」（もみじつたきなり）や「熊蟄穴」（くまあなにもこもる）といったあまり馴染みのないものもあります。「楓蔦黄」は平地のカエデ類やツタが色づくところで、11月上旬にあたります。「熊蟄穴」はクマが冬眠のために穴に入るころで、12月中旬になります。

今回は二十四節気と七十二候が表現する、春の生きものを見てみましょう。

ウグイスのさえずりが聞こえてくるのは嬉しいものです。どんなに寒くても、わたくしはここが一番、春が来たことを実感します。厳冬期に山地帯で鳥の調査をしていますと、1月中旬以降はさえずりが多くなることがわかります。林床は雪に被われ、木々はまだ芽吹いていません。こんな時期でも、ヒガラやゴジュウカラ、キビシリなどはよくさえずっています。「冬至」を過ぎると日の出の時間が徐々に早くなりますから、彼らはこうした季節の変化を敏感に感知しているのかもしれない。

2月中旬になるとウメが開花し、花の蜜を求めてメジロやヒヨドリが飛来します。ウメ



ウグイス。都留市の市の鳥でもある



巣に巣材を運び込むスズメ



萼筒がちぎられた  
ソメイヨシノ



フキノトウ

の花は香りがよいので、持ち主に許可をもらって枝を少しいただき、春を持ち帰る楽しみがあります。日当たりのいい場所では、フキノトウ（フキの花茎）も地面から顔を出していることでしょう。

## スズメの巣

3月上旬の「啓蟄」<sup>けいちつ</sup>は、土のなかの虫が動き始めるころです。クロヤマアリは2月中旬には地上に出てくるものがありますが、昆虫の活動が活発になるのは3月に入ってから。明るい山道でテングチョウやミヤマセリ、ビロードツリアブが見られます。アブラチャンやダンコウバイの花も咲き、ヤマアカガエル

の産卵が始まります。

「啓蟄」の次候は3月中旬の「桃始笑」（もはじめてわらう）で、モモの花が咲き始めるころです。じつさい、中屋敷フィールドにあったモモは3月中旬に開花していましたので、概ね一致しています。

「春分」の初候は「雀始巢」（すずめはじめすくう）で、3月中旬から下旬です。スズメが巣作りを始める時期のことですが、スズメの巣を見たことのある人はどのくらいいるでしょうか？ 同じように人家に巣を作るツバメとは違い、スズメの巣は建物の隙間などにあるため、巣そのものが見えることはありません。しかし、建物の隙間や巣箱から巣材の一部が出ている場合があることから、そこにスズメが巣を作っているとわかります。

## 蜜を盗む

「春分」の次候は3月下旬の「桜始開」（さくらはじめてひらく）。サクラ類の花が咲き始めることを意味します。いま、私たちの身近にあるサクラ類といえばソメイヨシノで、学校や市区町村などの公の建物の周辺によく植栽されています。ソメイヨシノは江戸末期

から明治初期に作られた園芸品種ですので、ここでいう桜は在来種のヤマザクラだと思います。花期や分布域を考えてもヤマザクラが妥当と考えられます。

ところで、メジロやヒヨドリはソメイヨシノの蜜をよく舐めに來ます。スズメもソメイヨシノの蜜を利用しますが、スズメの場合は萼筒<sup>がくとう</sup>（いわゆる花びらのつけ根）のところにちぎって蜜を舐めます。これを盗蜜<sup>とうみつ</sup>と呼びます。スズメが盗蜜をしたソメイヨシノの花は地面に落ちていることがあるので、今年はぜひ、盗蜜の痕跡を探してみてください。

二十四節気と七十二候にある春の生きものを紹介してきました。寒く厳しい冬が終わるころ、鳥のさえずりや昆虫の出現、ウメやサクラ類の開花など春を告げる事象に触れるのは嬉しいものです。ここには、春を待ちわびる心情があらわれているように思えます。



春を告げるフクジュソウ

※生きものは地域や地形などによって、出現や開花の時期が異なる場合がありますので、必ずしも全国的な傾向を示すものではありません。



## 都留お庭訪問

キウイブームと戦争。都留の庭について調べたら、思いもしない単語が飛び出した。

南條新（初等教育学科1年） 文・写真



遠藤先生のお庭。左がカキで、右がウメ。これらは30年前にご主人によって植えられたものだ

大学の周りを歩いていると、よくキウイの木を目にする。ふつうの家の庭に植えられていたり、空き地に生えていたり、いたるところにある。何か理由があるのか気になっていた。

そこでキウイのことを先輩に聞いてみた。すると、キウイブームというものがあつたというのを、先輩の下宿先である大冨<sup>おふね</sup>荘の大家さんがおっしゃっていたそう。また、本誌で何度もお世話になっている遠藤先生と遠藤静江<sup>えんどうしずえ</sup>さん（82）は、実のなる木が戦争と関係があるかもしれないとおっしゃっていたそう。実のなる木が植えられた理由についてお話をうかがうことで、都留の昔のことを知ることができかもしれない。そう思つて遠藤先生と、大冨<sup>おふね</sup>荘の大家さんである小俣<sup>おまた</sup>陽<sup>あきら</sup>さん（83）、弘子<sup>ひろこ</sup>さん（83）にお話をうかがうことにした。

### 子どものおやつ

1月18日、まずは遠藤先生に戦争と実のなる木の関係についてうかがった。遠藤先生が子どもだったころ、都留ではすでに、どこの家の庭にも実のなる木が植えられていた。今のよう

毎日白いごはんが食べられる生活とは違って、戦争中は家の周りに生えている草を食べることにさえあつたという。今では考えられないくらい食糧が不足していたのだ。だから自分の家にある木を植えて、子どもにおやつとして食べさせていた。

当時はグミやユスラウメという実のなる木が都留の庭でよく見られたけれど、今はそれらの木が都留で減ってきているという。食糧不足が改善されるにつれて、わざわざ実のなる木を植える必要がなくなったからではないかと遠藤先生はおっしゃる。たしかに今はお店に行けばお菓子が売られていて、低価格で手に入る。また実のなる木は、庭にある以上剪定<sup>せんてい</sup>をしてやらなければならない。植えたままほったらかしにしておくと、木が枯れたり腐ったりして実がとれなくなる。そうやって、当時多く見られていたグミなどの木は減ってしまったという。

## キウイブーム

1月31日、今度はキウイブームについて、小俣さんご夫妻にお話をうかがった。キウイ

が流行し始めたのは平成に入ってから。そんなに昔の話ではないと陽さんはおっしゃる。ブームになった理由と思われるのは、当時卵のような楕円形で表面に茶色の短い毛が生えているキウイの実の見た目が目新しかったことだという。私もキウイの実の見た目に惹かれる。あの産毛のようなものをつい触りたくなってしまうのだ。



大富祢荘のキウイ。ブドウのように棚を使って育てる

陽さんは、大富祢荘だけではなくご自宅のお庭でも、実のなる木を育てているという。大家さんたちは実のなる木の種を手に入れたから育てるまでの話を、事細かに話してくださいました。どうしてそれらの木を植えたのかをうかがうと、土地が余っていて困っていたからと陽さん。余った土地を利用したかったという。最初は何かを作って売り物にしようと思っていたのだとか。今は大富祢荘に下宿している学生にただで分けることもあるそう。また、都留の土地は果物作りには向いていないらしく、育てるのが大変だともおっしゃっていた。

実のなる庭木を植えた理由をたずねることから始まって、戦争中の生活や都留の土地についてなど、さまざまなお話を聞くことができた。それは実のなる木が、庭という人の暮らしに近いところで、その家の人と一緒に暮らしてきたからだと思う。

実のなる木は、その木を植えた人や育てた人、実を食べた人たちと思い出を作っていく、その家の庭に住む家族のような存在だと思った。

# 仮はく製は生きている

『フィールド・ノート』の編集室の冷凍庫には鳥の死体が保存されている。

その鳥たちを仮はく製にするという話を聞いたのは、12月のこと。そのときは、仮はく製づくりを見る機会なんて、めったにないことだから見学したいと思う程度だった。

## 死体を扱う

仮はく製について深く考えるようになったきっかけは、以前につくったことがある先輩から、見学前日に投げかけられた「死体を扱う」という言葉だ。先輩は「初めて死体を触ったときはこわかった」「メスを扱うか不安だった」と言っていた。私は、仮はく製づくりについて何も知らないし、分からないことばかりだった。しかし、「死体」「メス」とい

う言葉が具体性をもたせてくれて、少し考えただけで、たくさんの疑問があふれてきた。どんな鳥を仮はく製にするのか、どこからメスを入れるのか、鳥は柔らかいのか、血は出るのか、虫が出てこないか……。もちろん、死体や道具の扱いに対する不安はある。しかし、初めての仮はく製づくりが楽しみで、わくわくしながら眠りについた。

## 仮はく製づくりを見学

仮はく製づくりは、本学非常勤講師の西教生<sup>のりお</sup>さんが指導してくださる。1月30日、教室へ着くとすでに鳥の体長や体重の計測が済み、西さんがハサミを使って脚の関節を外す作業をしているところだった。

今回仮はく製にするのは、体長30センチほどのオオバン。オオバンは水鳥なので、水かきが発達していて足の指がとても立派だ。しかし、関節を外すと脚はだらんと力がなくなつて、さきほどまでの力強さが感じられなくなつた。私は授業があつたので作業の途中で退室した。午後再び教室へ行くと、オオバンの仮はく製は完成したようで、新聞紙にく

るまれていた。

見学をして、仮はく製のつくりかたや道具の扱いかた、オオバンの体の特徴、外見からだけでは知ることのできない内部の構造を以前より知ることができた。

## キビタキの仮はく製をつくる

見学をした1週間後、自分でじつさいに仮はく製をつくることになった。西さんから受け取ったキビタキは10センチほどで、手のひらにすつぽりと収まる。キビタキの首は、大



キビタキは頭から尾羽までは黒いが、腹の部分は白っぽいところと、わずかに黄色味がかったところがある





取り出した中身の大きさは、単一電池よりひとまわり小さいくらい

切に扱わなければ取れてしまいそうなくらい安定しない。ゴム手袋をした私の両手は自然と水をすくうときのような形をしていた。それを慎重に机の上に置いて、羽をかきわけて胸から尻へ腹を切っていく。初めて扱うメスは、力加減が難しく、力を入れすぎて身まで傷つけてしまった。

つぎは脚の関節を外す。キビタキの脚はオオバンよりもずっと細く、肉がほとんどついていないので、ハサミを使わなくても簡単に外れてしまう。キビタキの皮はかなり薄いため、皮を身からはぐるときは、破れないように慎重にはがしていった。ハサミで首を切ると

き、微笑んでいるように見えるキビタキの三日月型の目が視界に入った。私は心のなかで「ごめんなさい!」と言ってから、ひと思いに切った。そのあと、脳を綿棒でかき出し、目玉をピンセットで引き抜く。目には丸めた綿をつめた。

脳と目玉を取ったら、裏返しにした頭をもとに戻すのだが、ここが難しい。皮を破かないように少しずつ慎重に、内側を引っ張りながらもとに戻していくが、途中でもどかしくなつて、強引に引くと皮が大きく破れてしまった。ここまででいいいにやってきたので、皮が破れてしまったのはとても残念だ。

目に綿がつめられたキビタキは表情がなくなつていて、その無表情さが皮を破いた私を恨んでいるようにも見える。それでも、精一杯きれいにしたいと思いつつ、オキシドールで羽についた血を取り、ドライヤーで乾かす。その作業をしていると、もうすぐキビタキの仮はく製づくりが終わつてしまふのだと思つて、寂しくなつた。

初めてつくった仮はく製は、きれいとは言



綿を巻きつけた竹串を、中身があったところにいれて、切り開いてある部分を縫い合わせていく

いがたいものになつてしまった。キビタキには申し訳なく思う。それでも、私は自分の手でつくったキビタキの仮はく製に愛着を感じている。

キビタキにとっては仮はく製になることが第二の人生だ。仮はく製のキビタキは、新たに「仮はく製」という役割を与えられて生きている。仮はく製づくりは、ただつくるだけの作業ではなく、死んだ生きものに再び役割を与える、命を吹き込む作業なのだ。

今村遥香（社会学科1年） 文・写真  
南條新（初等教育学科1年） 写真

# 星空が教えてくれたこと

ふだん何気なく撮り続けていた写真。

今回初めて星空の写真の撮ることに挑戦してみると

今まで見えなかったものが見えてきた。

小俣溪和（社会学科1年）＝文・写真

きっかけは、12月14日にふたご座流星群が見られるという情報だった。もともと星空の観察に深く興味をもっていたわけではなかった。観察に行ったのは「せっかく流星群が見られるのだから」という思いの行動だ。21時から22時が流れ星を一番多く観測できるとの情報をもとに、その時間に合わせ、うぐいすホールの駐車場付近で観察することに決めた。うぐいすホール近くは街灯も少

なく、町の明かりも影響しにくいので星がはっきりと見えるのだ。

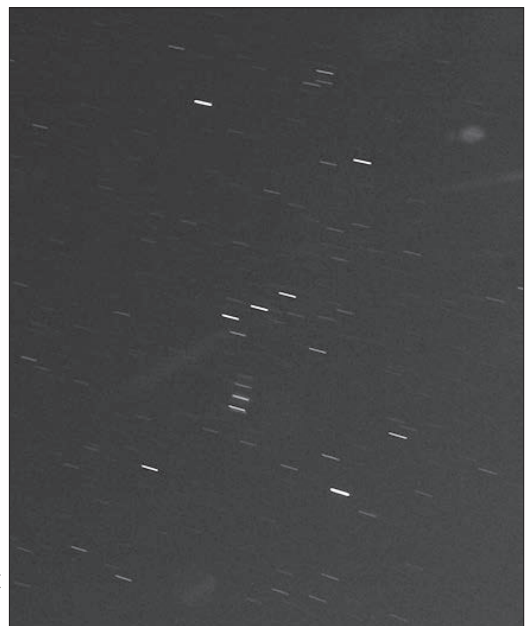
## 流星群

外はコートを着ていても震えるほど寒い。しばらく我慢して立ったまま空を眺めてみる。流星群といってもそんなに流れ星が見られるものではないと思っていた。けれど空を見上げてみると一つ流れたあと、1分もしないうちにまた別の星が流れる。たぐさんの流れ星が見られるとわかると、「もつと見たい」という気持ちが高まって体が温かくなってくる。もつと広い範囲の夜空を見上げたくなくて、コンクリートの上に横になった。背中にコンクリートの冷たさが伝わってさらに寒いけれど、火照った体が冷やされてなんだか心地よい。見上げた空の端つこのほうで周りの星よりちよつと強い光がパツと現れて空を走っていく。強い光でゆつくりと落ちるよう

## 星空を撮りに

その日を境に星空を眺めることが多くなった。そして、もともと写真を撮るのが好きな私は、星空を写真に収めたいと考えるようになった。撮影のチャンスをうかがっていたが天気恵まれず、なかなかいい夜が訪れない。早く撮りたいと思いながら待っている、やつとその日がやってきた。

1月16日、空を見ると雲一つない。前日までの天気の悪さが嘘のように、空が澄み渡っている。「待ったかいがあった」と弾んだ気持ちで写真を撮りに向かった。流星群を観察したところと同じ場所にカメラをセットする。試しに1枚撮ってみたが真つ暗でうまく映ら



1月28日、初めて星の撮影に成功したときの1枚



2月19日、うぐいすホール駐車場付近で撮った連続写真。3分ごとの写真を2時間半ぶん合成した  
(カメラ「Canon EosKiss X4. F14. ISO3200」)

ない。設定を変えながら何枚撮ってみても、だめだった。星空の写真を撮ることは思っていたよりも難しい。悔しさから星空を写真に収めたいという気持ちがさらに強くなった。

1月28日に今度こそ星空を撮ろうと、うぐいすホールへ向かった。星空を撮るのにちょうどいい設定にカメラを調整しておいたの  
で、あとはシャッターを開けておく時間を調節するだけだ。前回失敗したときは1分半に設定して暗かったので、今回はもつと多くの光を集められるように、3分間で撮ってみることにした。ちゃんと撮れているのだろうか。不安になりながら待つ。ドキドキして落ち着かないけれど撮っているあいだは確認もできない。気持ちを抑えながら待っていると、シャッターが切れる音がした。写真を見ると、さっきまで空で光っていた星たちが光の線になって現れていた。

### 動きを撮る

最初は写真を撮れば目に見える星たちが、そのまま写るだけだと思っていた。でもじつさいは少し違って、さっきまで自分の目に見えていた星たちよりも写真の星のほうが

明らかに多い。そしてそれらが線になって写っている。たった3分間でこんなに動くんて想像していなかった。撮影しているあいだも星空を眺めていたけれど、動きなんて気づきもしなかった。短い時間での動きは写真に撮ったからこそ気づけたことだった。

今まで生きものの写真を多く撮ってきたけれど、その写真は目に見える動きの一瞬を切り取ったものだ。写真はそういうものだと思っていた。今までの私には「動きがわかるように撮る」という感覚がなかったからだろう。私はカメラを構えていると、「なにかの瞬間」をとらえたいと思い、その瞬間に集中しすぎることもある。レンズを通して見ているものがコマ送りのように見えてしまい、撮るものの動きの流れを見ていないのだ。そうやって撮ったものをあとで見ると、写ったものがどんなふうに動いていたのか思いつくことができない。でも写っているものにはその前の状態もその後の状態もある。だからこそ動きの流れを見て、写真でもその「動き」を感じ取れるような写真を撮りたい。星空を撮ったことがきっかけで、写真で撮ることのできる「動き」に気づいたのだ。



11月28日 いたずらっ子？



先週、突然カメラを「じーっ」と見るような姿が見られ、こちらがドキッとしました。まあいい目でカメラを見つめ、口は「ニヤリ」と笑っているように見えませんか？

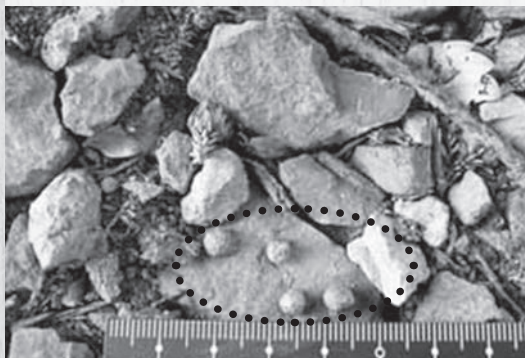
このムササビが、春生まれの子どもののかは判別できていませんが、今年ここで育ったムササビなのかもしれませんね。

# ムササビ 観察日記

2013年、ムササビライブカメラを2つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

1月8日 ムササビの糞



巣箱のなかにひとつも糞が落ちていないことに気がつきました。ムササビは、糞をどこにしているのでしょうか？

巣箱の木の下の木を見ると写真のような糞がたくさん落ちていました。ムササビは夜行性なので、夜巣穴から出たときのものなのでしょう。

12月1日 尻尾からちらり



最近は寒くなったせいか、ムササビは丸まって寝ています。その丸くなりかたにもバリエーションがあるようです。写真では、仰向けに丸まりつつ尻尾の陰から寝顔がちらり。大きな尻尾を掛け布団代わりにしているように見えます。睡眠中に体温が奪われないようにするための配慮なののでしょうか。



### 「ムササビ観察会」をおこないました(12月14日)



子ども自然教室のイベントで「ムササビ観察会」を開催しました。

午後3時45分ごろから本学自然科学棟にて、ムササビの体のつくりなどを学ぶ講座をおこないました。ムササビの全長は70cmほどと、結構大きいのです。子どもたちもムササビの標本を見てびっくり。次々と「大きい!」「でか!」と驚きの声があがりました。

ムササビについての興味が高まったところで、今宮神社に移動し観察開始。午後5時ごろに御神木のウロ(木の内部が朽ちて空洞になった穴)からムササビが顔を出しました。この日は、2ヶ所のウロからそれぞれ1頭ずつ顔を出し、その15分後には2匹同時に滑空。冬は木の葉がないため、滑空のようすをよく観察することができました。全員がムササビの滑空を観察できた、大変満足な観察会となりました。

### ムササビコラム

## — ムササビの冬越し —

ムササビは「冬眠しない」ということをご存知でしょうか。彼らは草食動物で、木の葉や実、果実などを食べて暮らしています。植物は、肉などに比べてエネルギーになりにくいので、草食のムササビはヒトよりずっと少ないエネルギーで生きていることになります。さらに冬になると森では食物が減ってしまいます。そのうえ気温も低くなるためムササビにとってはとても暮らしにくい季節なのではないでしょうか。そんな冬、ムササビは極力体力を使わないよう、無駄な動きはせず木の枝の上などでじっとしていることが多いようです。





## ナミテントウがやってきました

毎年10月下旬から11月中旬にかけて、本学自然科学棟の非常階段には多くのナミテントウが越冬に集まります。いまから30年ほど前は、10万頭以上のナミテントウがいたと推定されています。2000年ごろは2～3万頭で、2014年は1000頭ほどと越冬個体数が年々減少しています。

このナミテントウは自然科学棟で冬を越し、春には飛び立って行きます。アブラムシの仲間を食物としているため、春以降は樹上にいることがほとんどです。そして、秋にまた越冬に集まって来るナミテントウは、春以降に生まれた個体です。 (西教生)



写真中央に黒く見えるのが越冬しているナミテントウ



## しめ縄作りを体験しました

12月23日、ミュージアム都留で開催された「正月しめ縄作り作やすとみかずお」に参加しました。講師は都留市郷土研究会の安富一夫さん。当日は親子連れや大学生、地域のかたを含め30人ほどの人で賑わい、和気藹々とした雰囲気でおこなわれました。

安富さんからお正月飾りについての講義を受けたあと、じっさいにしめ縄作りに挑戦。稲藁を自分で整え縄を作っていく作業は思った以上に体全体を使い、慣れないうちは大変でしたが、自分のしめ縄がひとつできると、もうひとつ作りたいと思うほど熱中していました。 (金原由佳)



しめ縄の材料となる稲藁を整える作業から自分たちでおこなう



## 富士道を歩く会の冊子ができます

富士道を歩く会は、2年間かけて都留市郷土研究会のかたがたと富士道を歩きました。富士道やその周辺の歴史や人の暮らしを追った記録をつづった冊子『富士道を歩く会』をブックレットという形で発行します。ブックレットは『フィールド・ノート』が長期にわたり記録してきたものを、本誌に載せきれなかった部分を含めひとつの冊子にまとめたという気持ちから生まれました。

その第一弾である『富士道を歩く会』は、郷土研究会のかた、当初から中心となって参加されたOB・OGのかたがたの多大なる協力のもと発行します。これからもひとつのテーマを掘り下げた冊子を毎年1冊ずつ発行していく予定です。 (別符沙都樹)



富士道を歩く会ブックレットの表紙



12月から2月のフィールド・ノート編集部の活動のようすをお知らせします。  
『フィールド・ノート』編集部=文・写真



2012年10月6日、尾崎山で撮影【編集部】

2015年1月20日、都留市在住の小林義孝さんこばやしよしとかからニホンジカに関するメールをいただきました。そこには、いま都留市でニホンジカの進出が大きな問題となっていること、いつごろどの地域で見かけるようになったかなどの貴重な情報が記されています。ご本人の了解を得てここにメールの一部をご紹介します。

### 『フィールド・ノート』編集部 御中

昨年9月議会の2013年度決算付属文書である事務報告(主要施策の成果説明書)によると、年間に捕獲(処分)した鹿が2010年16頭、2011年17頭、2012年28頭、2013年62頭と急増しています。私も驚いたのですが、すでに鹿の進出が大きな問題となっており、その対策が進められているからです。

鹿による山林の被害については私の知る限り20年以上前(もっとずっと前からかもしれませんが)から問題になっています。一つは丹沢山塊の鹿で、木を植えても植えても鹿に食べられてしまい対策が追いつかない状態です。この鹿が道志村を越えて、盛里や菅野地域に出没してすでに10数年たちます。私も夜間、盛里の県道で3回遭遇しました。一方、北都留の丹波山村、小菅村では両村の村長が20年来県に鹿対策を要請していると思います。この北都留の山を荒してきた鹿はいまや大月市を越えて都留市に進出して来ています。ということで、都留市は南東の方面と北東の方面と両方から鹿が押し寄せてきている状態です。前年度捕獲の62頭はその表れだと思います。

10年ほど前、イノシシが異常に都留市の町中に出没したことがありました。そのうちの1頭が都留市駅のホームや周辺の道路を走り回り、1ヶ月後にわが家の裏の畑でオリに入ったという事件もありました。市は毎年猟友会に捕獲を依頼していますが、会員の高齢化もあって「有害鳥獣対策」は年を追って困難な課題となっています。

山といえば登山の対象ではあっても生業としての林業の対象・管理から外れ、山が荒れ、〈山にも畑にも人がいない〉状態が、サル、シカ、イノシシなどの進出を許している原因と思われます。気が長いと思われるかもしれませんが、都留市の産業構造や釣り合いのとれた経済政策についての検討が必要と思っています。



|                     |
|---------------------|
| 発行人                 |
| 北垣憲仁 (13-15)        |
| 統括編集者               |
| 西教生 (34-35)         |
| 編集長                 |
| 別符沙都樹 (10-12,22-23) |
| 副編集長                |
| 伊藤瑠依 (4-5,26-29,33) |
| 舟田早帆 (1,8-9,48)     |
| 編集                  |
| 廣瀬はづ紀 (2-3)         |
| 加藤萌香 (30-32,42-43)  |
| 金原由佳 (6-7,16-18)    |
| 今村遥香 (38-39)        |
| 小俣溪和 (40-41,46-47)  |
| 高橋未瑠来 (44-45)       |
| 長尾泉 (19-21)         |
| 南條新 (24-25,36-37)   |
| ロゴデザイン              |
| 工藤真純                |

[ ] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 84 号  
発行日: 2015 年 3 月 19 日  
発行部数: 500 部  
発行・編集:  
〒402-8555  
山梨県都留市田原 3-8-1  
都留文科大学  
コミュニケーションホール地下 1 階  
地域交流研究センター  
フィールド・ミュージアム部門  
『フィールド・ノート』編集部  
E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下 1 階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

## 編集後記 今年の抱負

ひととの付き合いを大切にしていきたいです。昨年はいろいろなところに出掛けさまざまな人と触れ合ってきました。学内での仲間たちや先生、出掛け先で時間を共にした人たち。年齢も職業も住んでいる地域もみんな違います。その人たちと時間を過ごし、学んだことはたくさんあります。そして、これからもたくさんの人と出会い、交流していくなかで今まで出会った人との繋がりを大事にしつつ、新たな人との繋がりを築いていきたいと思います。(廣瀬はづ紀)

つでの生活は、穏やかなものです。学生である以上、勉強に励むのは当たり前ですが、それ以外の時間はゆったりと気ままに過ごしています。最近、雪が降る日に空から降ってくる結晶を眺めたり、その翌日にはうら山に登って足跡を探したり。都留に住んで 3 年目になる今年は、農業に挑戦してみたいと思っています。日々少しずつ変化する農作物に興味があり、自分で一から野菜を育ててみたいです。今年は、何ごとにも前向きに、興味の赴くままに活動してみようと思っています。(加藤萌香)

じっこうあるのみ! な 1 年にしたいです。去年は大生活初めの年ということもあり、ただご飯を作り洗濯をして、授業を受けるだけで 1 日が終わっていました。やりたいことがあっても、なかなか実行に移すことができていませんでした。ですが、もうすぐ都留に来て 1 年。大学生活にも慣れて、時間のやりくりは以前より上手になったはず。だから、去年やりたいと思ってできなかったことや、これから思いつくやりたいことを、全部実行するつもりで突っ走って行こうと思います。(南條新)



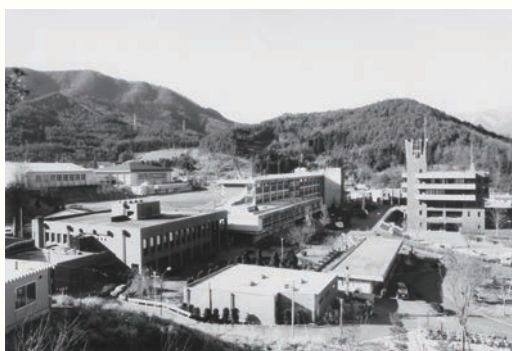
次回予告  
『食べる』(仮)  
2015年6月 発行予定







## 都留文科大学の変遷



昭和 59 年ごろの本学を写した航空写真



自然科学棟から撮った現在の本学（2015.02.27）